



東京の渋谷駅から徒歩5分という好立地に区立宮下公園はある。ここはビルやデパートで埋め尽くされた渋谷の街に、かろうじて木々が広がり、無料で皆が利用できる、ほぼ唯一の場だ。本誌でも紹介されたが(08年11・12月号)、この公共公園がよいよ大手企業に売られようとしている。8月27日、渋谷区長とナイキジャパン社長の間で、命名権売却の調印式が非公開で行われ、区報には改造後の完成予想図が掲載された。すでにあるフットサル場に加え、新たに有料のスケートボード、ロッククライミングなどを設け、「宮下NIKEパーク」との名称で来年5月のオープンが予定されている。この計画に反対する「みんなの宮下公園をナイキ化計画から守る会」は、改造工事のため公園使用を禁じられる直前の8月30日と31日、「宮下公園サマーフェスティバル」を開催した。フリーマーケットやライブ、展覧会、上映会、ワークショップ、シンポジウムなどを開き、公共空間としての宮下公園を最大限に利用することを追求したフェスティバルだ。公園の利用者が特定されることは、表現する人や場が特定されることでもある。



Route 246 vol.4

公共とアート
文・いちむらみさこ



展覧会は、公共の場で、差異のある者どうしが、いかに協同できるかを公開の下に実践する試みであった。2日目は台風が直撃し、作品が吹き飛ばされ、大雨に打たれ、泥まみれになっていた。いくつかの作品は、終了後も搬出されず展示されたまま。この展覧会は、美術館やギャラリーのように、アート作品が安定的な空間のなかで守られることがなく、作品の置かれているその場が、社会的・政治的に変化していく。公園は、いつも何か創造される場として、また再生される場として、開かれていることが重要だ。現在も、宮下公園を守る活動は継続中である。

参加者: いちむらみさこ、イルコモンズ、植松青児、遠藤一郎、小川てつお、黒田将行、武 盾一郎、廃人殿号、林 加奈子、久恒亜由美、藤井 光、MIZ ほか
撮影: 中根静男